

しまい間違えた絵はがき

独立したデモ・小さな調査

1912年の絵はがきは、Valombreの博物館の展示台に置いたままにしておくはずでした。しかし、記録簿に記入されないままロッカーにしまわれています。映像には、一人の人物が絵はがきを取り、自分のロッカーへ直接運ぶ様子が映っています。他の人への受け渡しはありません。ロッカーの番号はコートに隠れて見えません。小さなメモには、場所を示すコードが書かれています。ロッカーと、その人物を特定してください。

この物語は、完全版の調査資料とは独立しています。手がかりはすべて、この二ページにあります。外部の知識は必要ありません。目標所要時間：5-10分。

資料1・二枚の写真

写真	本当の時刻	確認できること
確認用の写真	12:17	絵はがきは展示台の上にある。
次の写真	12:22	絵はがきが展示台からなくなっている。

移動は一度だけでした。絵はがきが展示台から持ち出されたのは、12時17分より後、12時22分より前です。両端の時刻は含みません。デモに記された時刻はすべて正確で、時計の補正は必要ありません。

資料2・預け入れの自動記録

入退室管理には、絵はがきを運んだ人物が実際に開けたロッカーが記録されています。コードは32です。途切れない映像により、この記録が絵はがきに関するものと確認できます。読み方：最初の数字は行、二つ目の数字は列を示します。一組の座標から、ロッカーの文字が分かります。例：13は1行目、3列目を示し、Cとなります。

行 / 列	1	2	3
1	A	B	C
2	D	E	F
3	G	H	I

記録が示すロッカー：



架空のValombre郵便博物館の雰囲気を描いたイラスト。

誰が絵はがきをしまったのか。

独立したデモ・手がかりを照合する

展示台に手が届いたのは、Éva、Malik、Noraの三人だけです。以下の時間はカメラで確認されたもので、本人の申告ではありません。アクセスカードはそれぞれの所有者が持ち続けており、記載されたロッカーだけを開けられます。無理やり開けられた鍵也没有せん。

人物	展示台の近くにいた時間	利用できるロッカー
Éva	12:18-12:21	H / I
Malik	12:24-12:28	G / H
Nora	12:16-12:23	F / G

同じ人物が、その時間範囲に絵はがきを取ることができ、解読したロッカーを開けられる必要があります。ロッカーを開けられても、到着が遅すぎれば不十分です。適切な時刻にその場にいても、アクセスカードでそのロッカーを開けられなければ不十分です。

誰が絵はがきをしまったのか。

他の二人は、なぜ除外されるのでしょうか。

解答は、自分の結論を出してから読んでください。このデモでは、証拠を照合するという考え方を体験できます。完全版では、時計のずれた機器の時系列と、箱の組み合わせの復元が加わります。



架空のValombre郵便博物館の雰囲気を描いたイラスト。

デモの解答

しまい間違えた絵はがき

ヒント1

32については、まず3行目を探し、その行の二つ目のマスを見てください。

ヒント2

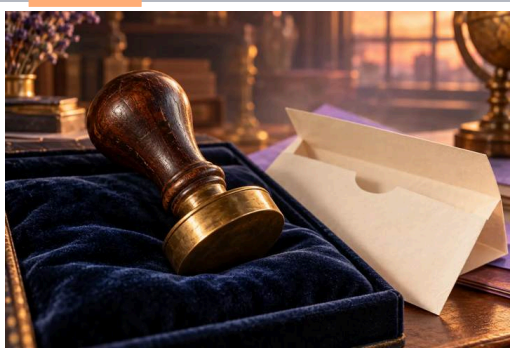
得られる文字はHです。Hを開けられる人物は二人いますが、絵はがきがなくなった時刻に展示台の近くにいたのは一人だけです。

結論：Éva、ロッカーH

コード32はHを示します。Évaは、その時間範囲内である12時18分から12時21分まで展示台に触れることができ、アクセスカードでHを開けられます。MalikもHを開けられますが、到着は12時22分より後です。Noraは適切な時刻にその場にいましたが、Hを開けられません。したがって、一連の出来事すべてと矛盾しないのはÉvaだけです。途切れないカメラ映像とアクセスカードの交換がなかったことから、他の人への受け渡しも除外できます。

絵はがきはHで見つかります。Évaは、清掃中に安全な場所へしまったものの、受付へ知らせることを思いつけなかったと説明します。博物館は記録簿を修正します。善意であっても、しまう場所を間違えることはあるのです。

この解答は、完全版「Valombre消失事件」のロッカーや人物を明かしていません。



架空のValombre郵便博物館の雰囲気を描いたイラスト。